

なくなった人形

小川未明

青空文庫

冬ふゆでありましたけれど、その日ひは、風かぜもなく穏おだやかで、日ひの光ひかりが暖あたかに、門かど口ぐちに当あた
 っていましたので、おみよは学が校っこうから帰かえりますと、ごぎを敷しいて、その上うへで、人にんぎよう形が
 や、おもちゃなどを出だしてきて遊あそんでいました。すこし前まえまで、近きん所じよのお友ともだちがきて、
 いっしょに遊あそんでいたのですが、お友ともだちはちよつと用ようができて家うちへいったので、後あとには、
 まったくおみよ一人ひとりとなつたのでした。けれども、彼かの女じよはすこしもさびしいとは思おもいま
 せん。かわい人にんぎよう形ががそばにありますから、それを抱だいたり、下したにすわらせたり、ま
 たそれにものをいったり、おもちゃのお膳ぜんや、茶ちゃわんや、さらなどに、こしらえたごちそ
 うを入いれて、供そなえてやつたりしていますと、けつしてさびしくもなんともしなかつたのであ
 ります。
 その人にんぎよう形がは、今ことし年の春はる、田いな舎なかから叔父おじさんが出でてこられたときに、叔父おじさんといっ
 しょに、町まちへいつて買かつてもらつた、好すきな、たいせつにしている人にんぎよう形がでありました。
 日ひは、だんだん西にしの方ほうへまわりましたけれど、まだそこには、暖あたたかな日ひが当あたつていま
 した。

「さあ、こんどはなにをおまえにこしらえてあげようかね。」と、おみよは人にんぎよう形がに向む

かつて、独り言をもらしたのです。

そのとき、あちらのさびしい路のほうから、こちらにやってきた、哀れなふうをした、七つか八つになったくらいのお食の女の子がありました。どこへゆくのでしょうか、ふと、この家の前を通りかかりましたが、お食の子は、おみよが、いま人形にごちそうをこしらえてやろうとして、菊の花や、山茶花の花弁を、小さな刃物で、小さなまないたの上に乗せて刻んでいるのを見て、思わず歩みを止めて、しばらく我を忘れてじつとながめていました。

お食の子は、まだ産まれてから一度も、そんな美しい人形や、おもちゃ道具を手に持って、遊んだことがなかったのです。お食の子は、おみよの幸福な身の上をうらやましました。なんで自分も、あの方のように生まれてこなかったのだろう。自分はいつになったら、あんなかわいらしい人形や、おもちゃを持つことができるだろうと、真におみよの身の上をうらやましく思つてながめていたのです。

お食の子は、いつしか自分というものを忘れてしまつて、そのかわいい人形の顔や、姿に見とれてしまったのです。なんといいかわいい人形だろう。まあ、あの人形は私の顔を見て、笑っているのじやないかしらん。あれ、ほんとうに私の顔を見

て笑っている。私はちよつとのまでいいから、お嬢さんをお願いして、あの人形を抱かしてもらおうかしらん。ほんのちよつとのまでいいから、あのかわいい人形を手にとつて、よく顔を見たいものだ、ただ一度でもいいから顔を見たいものだ。それで、もう私はたくさんだから……そういつてお嬢さんをお願いしてみようかしらんと、乞食の子は一人胸のうちに想い煩っていました、いやいや、なんでこんな汚いふうをして、ほかの人々から平常乞食の子！ 乞食の子！ と、呼ばれているものを、なんで、この家のお嬢さんが私に人形を抱かしてくださるものか、かえつて、そんなことをいつていやな顔をされるより、黙つて、こうしてここで見ていたほうがいと、小さな胸で想い返しました。そして、乞食の子は、いつまでも垣根のきわに立つて、こちらを見ていたのです。おみよは、人形になにか別のごちそうをこしらえてやろうと思つて、外へ青い葉かいろの変つた菊の花を探してこようと思つて、ごちから立ち上がりますと、その垣根のそばに、哀れな乞食の子がたたずんでこちらを見ていました。まだ年もゆかないのに、そして、こんな寒空なのに、身には汚れた薄い着物を着て、どんなに寒かろうと思ひました。おみよは乞食の子より二つ三つ年上であつたのです。

乞食の子は、いま、お嬢さんがどこへかいかれて、見えなくなつたこのまに、ちよつと

そのかわいい人形にんぎようを抱だいてみようと思おもつて、おそろおそろ近ちかづいて、なんの深ふかい考かんえもなしに、人形にんぎようを手てに取りあげてつくづくながめますと、それはかわいい人形にんぎようでありましたから、

「私わたしはいつもいつもお友ともだちもなくて、ただ一人ひとりでさびしくてならないの。私わたしといつしよに遊あそんでくれないの。そして、私の仲なのよいお友ともだちになつてくれないの。」といつて、乞食こじきの子こは人形にんぎようの顔かおをのぞきました。すると、人形にんぎようは優やさしく微笑ほほえんで、

「私わたしはお友ともだちになつてあげます。」といつたように、乞食こじきの子こには思おもわれました。乞食こじきの子こは喜こんで、かわいい人形にんぎようのほおに接せつ吻ぶんいたしました。

やがてそこへ、おみよは白しろい菊きくの花はなを摘つんで帰かえつてきますと、もう垣根かきねのそばには、乞食こじきの子この影かげが見みえませんでした。そしてござのところへきて、これからごちそうをこしらえて人形にんぎようにやろうと思おもいますと、大切だいじの大切だいじの人形にんぎようの姿すがたが、どこへいつてしまつたか見えなかつたのです。

おみよは大騒おおさわぎをしました。そして、どこへいつたろうとあつちこつち探さがしていますと、そこへ近きん所じよのおばあさんとが通とおりかかつて、なにをそんなに、探さがしているのかと聞ききましたから、人形にんぎようが見みえなくなつたのだといいました。

「あ、そんなら、いまあちらへ、乞食の子が人形を抱いて、頭をなでたり、ものをいったりして、夢中になつていったから、それじゃないか。」と、おばあさんは教えました。

おみよは、自分もそれに相違ないと思いましたから、急いでその後を追いましたけれど、もはやその姿は見えなかつたのであります。

おみよは、どうしてもその人形のことを忘れることができませんでした。そして、あの哀れな乞食の子をうらめしく思いました。すると、おみよはその晩、不思議な夢を見たのであります。

なんでも、そこは河辺のような木のしげつた間に、板や、竹を結びつけて、その上を草や、わらでふいた哀れな小屋の中に、七つか八つになった女の子が、すみの方にぼろにくるまつて、あの人形をたいせつに、しっかりと抱いて眠っていますと、寒い寒い星の光が、小屋のすきまをもれてさしこんでいるのであります。

目が覚めると、おみよはその乞食の子がかわいそうでなりませんでした。けれど、まだ彼女は、人形のことを思いきることができませんでした。明くる日、おみよは学校へいって先生に問うたのであります。

「先生、どんな場合にでも、ものを盗むということは悪いことですか。」
 「ものを盗むということは、いちばん悪いことです。」と、先生は目を丸くしていいました。

「先生、もしいせつなものを盗まれたときはどうします。」と、おみよは聞きました。
 「それは学校ですか、家ですか。」と、先生は問い返しました。

「家です。」

「巡査さんに届けて、その悪いことをした奴を縛ってもらいます。あなたは、なにか盗まれたんですか。」

「たいせつな人形を盗まりました。」

「人形を？ だれが盗んだんです。」と、先生はおみよの顔を見守りました。

「七つか八つになる乞食の女の子です。」と、おみよは答えました。

「乞食の子！」と、先生はいつて、しばらく考えていましたが、

「あなたは、巡査さんにいつて縛ったほうがいいか、また堪忍してやったほうがいいか、どちらがいいと思いますか。」と、先生は、今度は反対におみよに問い返しました。

「私は堪忍してやったほうがいいと思います。」と、おみよは勇んでいいました。

「あなたは人情のあるよい子だ。そうです、そうしておやんなさい。」と、先生は
いつて、おみよの頭をなでました。

不思議にもおみよは、またその晩、同じような夢を見ました。哀れな小屋の中に、七つ
か八つばかりの乞食の子がぼろにくるまって、しっかりと人形を抱いて眠っていると
ころへ、寒い大空の星の光がさしこんでいるのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

※表題は底本では、「なくなった人形《にんぎょう》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

なくなった人形

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>